

森を生かしたプロジェクトに取り組む高田理事兼副学長



たかた・かつひこ 1961年兵庫県生まれ。北海道大学院農学研究科博士後期課程修了。県立大木材高度加工研究所教授、同研究所所長などを経て、今年4月から現職。専門は森林資源遺伝学。

県内3大学・企業・自治体 連携プロジェクト

県立大副学長・高田リーダーに聞く

県立大、国際教養大、秋田公立美術大の3大学や企業、自治体が連携し、「森の価値変換」と「自律した豊かさ」をキーワードに秋田の未来を考えるプロジェクトに取り組んでいる。国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の「共創の場形成支援プログラム」（COI-NEXT）に採択され、2033年度までの最長10年間にわたり年間最大2億円の助成を受けて事業を展開する。プロジェクトリーダーの高田克彦・県立大理事兼副学長（64）に、具体的な取り組みを聞いた。

◆ ◆
— 森林に着目した理由は。

「秋田には木材や森林に関する研究の蓄積があり、秋田杉の加工技術もある。当初は『森林資源の利用』というテーマを考えましたが、ずっと『利用』を掲げてきて状況はあまり変わっていない。やらなければならないのは『価値変換』ではないかと考えた」

— 「森の価値変換」とは。

森林の「価値変換」が必要

「例えば、車の部品を木材で作るとなると夢みたいな話だが、なぜできないかというところは燃えるから。『燃えない木材』があればいいし、その研究開発は大学の出番となる。地元にある資源の価値を変え、これまでにないものをつくる取り組みと、そこから企業の新たな事業展開などの動きが出れば、今までにない価値がさらに生まれる」

車の部品に使えたら

— どのような研究開発に取り組むか。

「上空から森林を測量するほか、気象が激しく変化する中で森林地帯のバッファ（緩衝地帯）機能を探る。また、自動車部品など『こんなところに木材が使えたらうれしい』という要求に応えていく。木材を使ったまちづくりも目指す。木質耐火部材を使って今までにないまちをつくれば、まちの価値を高めることができる。秋田は家具メーカーも多いので、秋田美大の先生によるデザインで価値

プロジェクトで製作した家具を出展した木材製品展示商談会の秋田県ブース。今年2月、東京ビッグサイト（県立大提供）



を付加してどんどん輸出するようにしてほしい。このほか、テクノロジから少し離れるが、国際教養大をメインとして『自律した豊かさ』の指標も出したい」

10年後の秋田変える

— プロジェクトを立ち上げた経緯は。

「自分が所属してきた県立大や木材高度加工研究所のこれまでを振り返った時に、秋田の課題に対して何かできていたか、今後大学がどうなるかという危機感があった。木材の研究者だけでは未来の社会像は描けない。教養大や秋田美大の人たちと、大学と秋田にどう貢献できるか議論したのが出発点だった。プロジェクトのテーマは10年後の秋田を変えること。今の技術

でできることから社会を変えるのではなく、秋田に住む人たちが自分で未来を考え、そこに向けて自分たちで道をつくっていかたい、ということから『自律』のキーワードが出てきた」

— 今後重視することは。

「目の前の研究開発もすぐ大事なが、もっと大事なのは秋田の人たちに取り組みを理解してもらい、新たな価値を共有してさらに高めてもらうこと。そうすると外部の企業などが『何か面白いことをやっているな』『あそこに行くけど研究が進むな』というイメージを持ってくれ、さらに価値が生まれると思う。10年で事業を終えるのではなく、その先も取り組みを続ける拠点を設置したい」

（聞き手 岡田郁美）